

見上げれば星は天に満ちて

浅田次郎編

「見上げれば星は天に満ちて」・・・何て、きれいなタイトルなんだろう。書店でタイトルを見て中身をほとんど見ずに購入を決めました。小説家、浅田次郎氏が心に深く残った小説13編を収録した本書。森鷗外「百物語」、谷崎潤一郎「秘密」、芥川龍之介「疑惑」、小泉八雲「小泉八雲」など有名な小説家の作品が収められています。浅田氏曰く「いつも私の安息であった」という満点の星の如き物語をお届けする、という言葉もステキだなあ、と思っただけではありません。

作家の名前は知っているにもかかわらず、どれもこれも読んだことがないものばかりでした。この本に入っていないければ読むことがなかったであろうものばかりだと思います。そんな中で好きな一編となったものは、山本周五郎の「ひとごろし」です。タイトルを見たときは、読むのも辛くなるような物語じゃないか、と思いました。しかし、藩中一の臆病者と言われていた主人公が、自分が臆病者であるということ認め、それを逆手に取った戦略で誰も引き受け手のなかった上意討ちを相手を身体的に傷つけずにやつつける、という何ともスツキリとする物語。読んでいて、自分の弱点をきちんと認めることで、最大限自分を生かす方法を見つけることができる、ということを知りました。また、今まで浅田次郎氏の本を読んだことがありませんでしたが、このような物語を集めた浅田次郎氏の本も読んでみたいと思いました。

Y・C・



文春文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株)ファッションビジネス・御堂筋新聞